

## 2021年度 3.11 ユースダイアログ 内容

### 3.11 ユースダイアログ【1】

#### ■登壇者

- ・Aさん：岩手県大槌町で被災。現在は大学生
- ・Bさん：宮城県石巻市で被災。現在は高校生

#### ■登壇者二人の話の概要

- ・Aさん

当時のことを振り返るのは思い出したくない部分もある。

当時小学校3年生。授業中に地震があって机の下に隠れた。その後、小学校の上にあった高校に避難した。そこで家族はどうしているかと心配になった。夜になると食べるものがなかった。先生が持っていた飴をもらったぐらいでお腹がへっていた。寒かった。高校生がカーテンを切って布団にしてくれた。周りに友達がいたので、孤独ではなく、友達といられたので安心できた。

次の日早朝、父と祖父が迎えにきてくれて、父の実家に車で向かったが、車の後ろには愛犬が横たわっていた。津波で亡くなっていた。それをみたとき津波の深刻さを初めて知って泣いた。まだ母の安否はわからなかったが、大丈夫だろうと思っていた。それから毎日、父と母の姉が避難所や遺体安置所をまわり母を探していた。ある日、父が深刻な顔でお母さんが見つかったよと言った。お母さんに会えると思ってうれしかったが、お父さんは言いづらそうに「お母さんは津波で亡くなって、遺体安置所で見つかった」と言った。それが本当なのか、冗談なのか受け止めきれなかった。お父さんが涙を流し、姉が泣いているのを見て本当なんだと思って号泣した。次の日に遺体安置所でお母さんと再会した。行くまではもしかして父の悪いうそだと淡い期待を持っていたが、母の顔を見て泣いた。母が起きるんじゃないかと顔をさわると冷たかった。それから一週間ぐらい泣いて、暗い気持ちで過ごした。悲しかった。のちに学校が始まり、友達とも久しぶりに再会して、気持ちがやっと落ちついていった。

しかし、現実に気づけば気づくほど、気持ちが落ちていった。授業が受けられなくなり、保健室で過ごす日もあった。中学校からは気持ちが沈んでいくのが止まらず学校に行けず、引きこもっていた。ゲームをして現実を考えないようにしていたが、祖母からはゲームをしていることを注意され、祖父母とけんかをして仲も悪くなって、学校にさらに行きづらくなった。高校は定時制に通い、楽しく充実していたが、自分の中で気持ちが沈んでいる部分があって、祖父や祖母と喧嘩するのは変わらずだった。また学校に行きづらくなり、小学校からお世話になっている社会福祉士に相談し、通信制の高校に転入した。通信制なので家にいる時間が増え、祖母とのけんかも増えた。ある日、伯父から自分がこうなったのは祖母の教育が甘いからだと言われているのを聞いた。祖母とはけんかが多かったが感謝はしていたので、祖母が自分のせいと責められているのがつらかった。震災から初めて自分のスイッチ

がオンになった。

・Bさん

現在高校2年生で石巻から仙台の高校に通っている。当時は幼稚園の年長で記憶があいまい。家から海は500メートルぐらいで近く、父は海の仕事をしていて長期間帰ってこない仕事だった。震災当日は家に母と二人だけだった。幼稚園が終わって家に帰ってきたところで地震が発生した。地震がどんなものなのかわからなかったので、本当にこわかった。飾ってあった雛人形が全部落ちた。ガラスの割れる大きい音が大きく、とても衝撃だった。泣きながら自分の身支度をして、家の中で靴を履いて外に出た。雪が降って寒い日だった。

避難所の中学校は大津波警報が出ていたことで、大人たちはざわざわしていた。一人の先生がお迎えから戻ってきていなかったので心配だった。中学校はぎゅうぎゅうで、子どもの相手は幼稚園の先生が来てくれていて、大人たちは情報交換をしていた。電気がこなかったもので暗い中すごした。食べものが何もなかった。母の兄弟が被災していないから家に来ていいよと言われ、そこでしばらくは過ごしていた。娘が2人いて、そのお姉さんの部屋を借りていたが、親が見えないところで嫌がらせをされていた。今思えばストレスを発散する場所がなかったのだと思う。

震災後に家を見に行ったときに、近所の仲がよかった友達のおばあさんに会った。会えてよかったと言いが合ったが、おばあさん以外の家族は死んでしまったと聞かされた。その家族は車で避難したがおばあさんだけ車に乗れず、2階に避難して助かっていた。そのおばあさんに「〇〇の代わりに生きて」と言われた。今までだれかが亡くなるという経験をしたことがなかったので、すごくショックだった。親友が急にいなくなることがあるんだと悲しく、信じられなかった。死んだってなんなのかと思った。

家に着くと、土砂を出したり、食べるものを探した。1階は全部浸かっていたが、2階は大丈夫だった。母が作業しているときに、2階で泣いた。それまでは泣けなかったが、家に帰ったことで冷静になれたようで泣いてしまった。そのときに「なんで自分が生きているのかわからない、代わりに死ねばよかった。今から死んだら会えるかな」と言ってベッドで泣いていたらしい。

■お二人の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

お二人の話から、幼いときに大切な人を突然亡くするという喪失感や悲しさは計り知れないと感じた。幼稚園生だとしても地震のときの記憶や、そのときの会話、感じたことは忘れることはない。私たちは、子どもだからそのうち元気になる、忘れてしまうだろうと思っていなかっただろうか。子どもは言葉に出せないだけで、多くのことを感じ、悲しみ、今も心の奥底にあることがお二人の話からうかがえた。

Aさんはその悲しさをゲームをすることで忘れようとしていたが、ゲームをする意味を大人は理解していなかった。Bさんは、子どもの支援を小中高生だけではなく、幼稚園生も視

野に入れて欲しいと言っている。AさんBさん共通して、大人に話を聞いてもらうことで安心感やプラスな気持ち、一人ではないと思えたという。震災時の子どもの心のケアのあり方や、子どもの声に向き合うこと、大人になっても心の奥底に震災時の感情があるということを理解し、考えていく必要があると感じた。

### 3.11 ユースダイアログ【2】

#### ■登壇者 4名

- ・福島県いわき市で被災し、現在は東京に在住（Aさん・オンライン参加）
- ・岩手県陸前高田市で被災し、現在も同市に在住（Bさん・オンライン参加）
- ・岩手県釜石市で被災し、現在は仙台市に在住（Cさん・宮城会場で参加）
- ・福島県南相馬市で被災し、現在は福島市に在住（Dさん・福島会場で参加）

#### ■登壇者の話の概要

##### ・Aさんの経験談

震災当時、いわき市のとても海に近いところに住んでいた。地震があったのは放課後で、いきなり揺れ出し、窓枠が外れるくらいの大きな揺れで体育館も揺れていた。学校のまわりは工場地帯。工場は全壊したが、津波を防いでくれた。

不安が芽生えたのはその後の余震、原発のメルトダウン。学校がない日常、家にも帰れない中で寂しさと恐怖を感じた。メルトダウンの数日後、お母さんから避難を提案された。当時は避難と言うより、どこか違うところに行けるという気分だった。埼玉に1ヶ月ほど、その間何度か福島に帰るが、アパートは半壊で荷物もろくに取り出せず、必要最低限を持って避難した。

避難を終えて帰った時、家のまわりの状況は立ち入り禁止で恐怖というか、今までの日常とは違う感じを受けた。その年の後期、原発の不安から幼稚園の頃に住んでいた神奈川県に避難した。強制避難は国からの指示のため支援があるが、僕は幼い頃に喘息あつての避難だった。金銭面、土地探しなど、人脈もなく1から探すのも大変。前に住んでいたとしても知らない人ばかり。離れて暮らすわくわくもありながら、新しい土地で暮らす不安、友達と別れる寂しさがあつた。

##### ・Bさんの経験談

生まれつき脳性まひ車いすユーザー。小学校の時は特別支援学級に席を置きながら、授業は普通学級で受けていた。地震の揺れが収まってから、先生に抱きかかえられ、外用の車いすで校庭に運んでもらった。これまでやってきた避難訓練の本番だという思いで冷静にいられたが、校庭の地割れを見て恐怖を覚えた。校庭までの避難以上の訓練はやっていなかったからだ。

小学校は少し高台にあるため、祖父母を自宅に迎えに行った。祖父母と共に小学校へ向かう際に津波が堤防を越えたという防災無線を聞き、さらに高台の避難所へ行った。避難所で

は皆さんが地べたで生活している中、車いすで移動しなければならない困難さを感じていた。両親が内陸の福祉施設が福祉避難所となっていたのを見つけ、そこへ避難した。福祉施設の館内が広くバリアフリーなので、障がい者も高齢者も過ごしやすい避難所だった。障がいのある人だけでなく、子ども同士で遊んだり、ボランティアの大学生も多く、ボランティアの支えは大きかった。

最初は毎日が慌ただしくて寂しさを感じなかったが、転校することが決まった時に高田の学校で使っていた自由帳を見ながら、友達と離れるんだと初めて泣いた。

ふれあいランドでの生活は楽しいものだったが、知り合いが行方不明になったり、亡くなったり、これは決して楽しいことではないのだと段々と分かるようになった。人の命や財産が失われたということも実感するようになり、楽しい生活とその狭間にいた感覚だった。

#### ・Cさんの経験談

当時、釜石市の小学校に通っていて、そろばんの授業中に地震が起きた。机の下に隠れ、先生の指示で3階に避難した。二日前の地震で大丈夫だったこともあり、すぐに家に帰れると思っていた。

隣の中学校が外に避難していることを聞き、自分たちも避難した。そこで前回とは違うことに気が付いた。訓練をしていた避難場所に待機していたが、裏のがけが崩れ、隣の避難所に移動した。いつ収まるのか友達と話していたとき、下の方に何か来ているのが見え、ざわざわした。津波が来ていることに気づき、もっと高いところに移動を始めた。最初は学年ごとに移動していたが、まとまって移動できる状況ではなく、そのまま坂を上る人と先生と一緒に山を登る二手に分かれた。人の流れを逆流して先生を追いかけて山を登った。後ろを振り返ると10m位真下に津波が押し寄せてきていた。遠くに見えていた津波が目の前にきて、家の屋根が流されていることもわかり、戻れないことを自覚した。

波が落ちて、みんなと合流し、当時できたばかりの道路を移動して、釜石の中央にある市民体育館に避難した。段ボールを分け合って一夜を過ごしたが、高い場所にある避難所ではなく、波の音などが聞こえて怖くて眠れなかった。

避難当日は食べるものがなく、僅かなお菓子を数人で分けて空腹をごまかした。一夜明け地元の方が作ってくれたおにぎりを食べたが、3食食べられるようになるには時間がかかった。その後、市内にある小学校に移動、支援物資も十分にあったわけではないが、一か月程度を過ごし、それからみなし仮設住宅に移った。

#### ・Dさんの経験談

当時は小学校5年生。南相馬市小高区で家族6人で暮らしていた。体育の授業終わりに地震がきて、大きな地鳴りで地面が割れそうでとても怖かった。父が迎えに来てくれて家まで帰った。山の方に住んでいたため津波は大丈夫だった。その夜は余震に怯えながら過ごした。翌日、原発が爆発したニュースを聞いた。祖父は家の窓を閉めろ、カーテンも閉めて家

から出るなど言った。何が起きたのかわからなかった。その日の夕方に避難指示が出て鹿島区に避難した。そのときの渋滞や連なるブレーキランプは未だに心に残っている。2、3日で帰れると思い、ゲームとぬいぐるみや少量の荷物を持って家を出た。

そこから約1年半の避難生活が始まった。まず、栃木県の体育館に避難した。知らない人が隣に寝ている状態。体育館のテレビを見ていた大人たちが、このままだと帰れないと険しい顔をしていたのでとても不安になり、事の重大さを認識した。

その後南相馬市内で仮設住宅の暮らしを経験した。壁が薄くて騒音など大変だったが、家族だけで過ごせることが嬉しかった。高校進学タイミングで隣の原町区に家を建てて住むことになった。高校では大好きな地元小高区の活気を取り戻したい、自分にも何かできるのではないかと思い、復興ボランティア活動を始めた。避難所などでたくさんの人に支援してもらったので、活動することが恩返しになると思った。

たくさん辛い思いをしたが、震災があったことで、出会えた人、気づいたこと、得たことを大切に、当たり前のように感謝して生きることが、震災と向き合うことなのかなと思う。

#### ■登壇者の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

今回のユースダイアログでは東北3県の大学生が企画、運営から参加し、各大学からも参加者を募った。また登壇者4名は被災3県と広域避難という立場からお一人ずつ招き、各大学の大学生スタッフが聞き役となってお話を引き出していった。

全体セッションの中でのわがままについての質問でも、それぞれ異なった体験があり、また当時子どもだったからこそ語られなかったお話、一方で話すことのできない状況を作ってしまった大人の反省も感じる場所があった。様々な経験がある中で、語られにくい子どもの頃の記憶をこういった場で共有し合える事は、話す側、聞く側両者にとって学びがあり、改めて一人ひとりの話に耳を傾けることの大切さを感じた。同世代の学生と一緒に企画したからこそ、参加者からの被災体験も聞き出すことができ、登壇者と参加者が一緒になって当時を振り返ることができた。今後もこの様な場づくりが出来ればと思う。

### 3.11 ユースダイアログ【3】

#### ■登壇者 2名

- ・岩手県大船渡市で被災し、現在は静岡県に在住（Aさん）
- ・福島県白河市から愛知県に広域避難し、現在は京都府に在住（Bさん）

#### ■登壇者二人の話の概要

- ・Aさんの経験談

震災時は中学3年生だった。体育館で卒業式の練習をしていた時に大きく揺れ、校庭に皆で避難をした。海から数キロ離れた地域であったため、中学生は自宅に帰ることになったが、下校途中に地域の人から「津波が来ている。絶対に戻ってはいけない」と鬼気迫る様子

で言われて学校に戻り親の迎えを待った。最初は現実味もなく大きな危機感はなかったが、日が暮れても迎えが来なかったため、そこで初めてすごく大きい災害だったのかと思うようになった。夜遅くに親の迎えが来て、大変なことになっていると聞いた時には、これまでの日常が崩れてしまう不安を感じた。

自宅は津波の被害はなかったが、曾祖母の自宅が床上浸水で、地域の方が曾祖母をおぶって1階が浸水した3階建ての地域の会館に避難しており、そこに合流した。曾祖母は足腰が弱っていて移動が難しく、親兄弟や親戚など10数人で座布団をわけあい寒さをしのぎながら不安な一夜をそこで過ごした。翌日には自宅に戻ったが、家が流された親戚や職場の人でも我が家に来て1ヶ月近く皆で生活した。知らない人もいる避難所生活とは異なり、自宅で知っている人だけという状況で安心していた。

中学の卒業式は中止になった。高校の入学式は5月になり、それまでの間はボランティア活動をしたりしていた。津波被害のあった家の片づけや、支援物資があふれかえって整理が大変だったため、小学校の体育館にある物資の仕分け作業などを行った。5月に学校が始まり、新しい日常が始まって、そこで止まっていた時間がやっと動き出した感じであった。高校の同級生の中には、津波を見ながら逃げた人、ご家族を亡くした人、避難所から通っている人などもいた。みんなお互いに踏み込んだことは聞かず、当たり障りのない会話をしながら高校生活を過ごした。私は親族や自宅は無事だったため、もっと苦しんでいる人がいるのに、私が話していいのかなという葛藤や自分が大変とは言えないという感覚があった。

生きたくても生きれなかった方が周りにたくさんいた。そういう人たちのためにも何かできればと、この経験を伝えていかないといけないという気持ちがある。震災を経験していない人が自分事として考えるというのはなかなか難しいと思うが、まず自分の命が守れるように、災害が来るという前提で防災対策をしてもらいたい。家族と避難する場所を決めておくなど、できることをしていく必要がある。

#### ・Bさんの経験談

当時は小学生でした。卒業式の練習が終わった時にゴゴゴという音がしてその瞬間に大きく揺れた。体育館が壊れるのではと思うくらいの揺れでとても怖かった。校庭に避難した後、生徒は親の迎えなどでそれぞれ帰宅した。私も家に帰ったが、家の中はぐちゃぐちゃで余震も続いていたため、母と2人で車の中に避難して耐え忍んだ。その日は母の体調が悪く、父は出張でいなかったため心細く怖かった。車のラジオを聞いていると、福島原発が危ないという情報もあって、当時は授業で原発に関しても習っていたため、心がざわざわしていた。

その後も原発の状況が怪しかったため、母が「避難した方がいい」と、名古屋にある母方の祖母の家に家族3人で一時避難した。避難する時に、町の知り合いから「地元を捨てて逃げるのか」と両親が言われることがあり、逃げるとか捨てるとか言われてしまうのかとびっくりした。名古屋の祖母宅はワンルームだったので、そこでの生活は難しかった。原発の様子

も若干落ち着いたことや卒業式もあったため、白河市に戻り、そのまま地元の中学校に進学した。しかしその後も原発は上手く収まらなかった。母は放射能の影響を心配し、外出時はマスク、外での体育は駄目で、食べ物も気にしていた。母はずっと引っ越したいと言っており、父の反対もあったが、母子で名古屋に避難をすることになった。

名古屋に避難した後、名古屋の方言がきつく聞こえて馴染めなかった。クラスで浮いてしまい、悪口も言われてストレスが大きかった。中学生の時に原因が遺伝か、ストレスか、放射能の病気にかかっていることが判明。疲れやすくイライラするなど、外からは見えにくい病気であるため、そのしんどさを周りにわかってもらえないことが辛かった。震災への理解がなかったことも辛かった。中学校はストレスだったが、大学生がボランティアで勉強を教えてくれる場があり、それはよかった。単位制の通信制高校に進学してからはストレスも軽減し、病気もよくなった。

震災によって穏やかだった町や人が変わってしまった。大人たちのいざこざも見てきたため、地元に関しては複雑な気持ちが生きている。私が福島出身であることや東日本大震災を経験していると言うと、触れてはいけないという感じに扱われることがある。私の場合は、自分から話すことは大丈夫であるため、気軽に聞いてもらって関心もってもらえると嬉しい。

#### ■お二人の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

Aさんのお話しでは、足腰の弱いAさんの曾祖母が地域の人に助けられて避難できており、それは普段からの地域のつながりがあってこそだと感じ、改めて地域の大切さを学ばせていただきました。震災直後、深い悲しみや無力感を感じていたからこそ「ボランティア活動をすることで救われた」と話されましたが、子どもたちは支援される側だけでなく、地域を支える大きな力であり、地域の中に子どもたちの役割や動ける環境があることは、子どもたちにとっても非常に大切であると思いました。被災地では誰もが大変な状況であることから、「もっと苦しんでいる人がいる」と、自分の大変さはぐっと我慢をしてしまう、そういう方は多いのではと思います。そのため、お一人おひとりの声をどのように丁寧に拾い上げていくか、様々な取り組みが必要であり、これからも考えていく必要があると思います。

原発事故により広域避難をしたBさんが、地元の地域や人たちとの分断に子どもながらに直面したことは、本当にショックだったと思いますし、見えない放射能による被害の複雑さや難しさを感じました。住み慣れた土地から突然離れざるを得なかった避難者の方々にとって、避難先で生活再建はマイナスからのスタートであり、不安も大きいと思います。避難先の中学校生活では、本来であれば丁寧なサポートが必要であるにも関わらず、学校含め周囲に理解者がいなかったことは本当に残念です。何かできなかったのかと悔やまれますし、見えにくい広域避難の子どもたちへの支援については、お一人おひとりの声を聞きながらこれからも考えていく必要性があると感じました。また、広域避難者の存在は、社会に知ら

れていない部分が多いと思いますので、伝えていくことも大切であると思います。

### 3.11 ユースダイアログ【4】

#### ■登壇者 2名

- ・福島県浪江町で被災し、現在は宮城県石巻市に在住（Aさん）
- ・岩手県釜石市で被災し、現在は東京に在住（Bさん）

#### ■登壇者二人の話の概要

##### ・Aさんの経験談

高校生の時に震災を経験した。当時は震災や原発事故が起きることなど頭の片隅にもなかった。電灯や道路が波打つ中、校庭に避難するも、その日は学校が避難所となり一夜を過ごすことになった。近くの駅が津波で流されたという情報が入り、落ち着かない様子の子も多くいた。当時の教室は4年後までそのままの状態だった。

11日の夜遅く、親が迎えに来てくれて家に戻った。家にいる時に、突然の地鳴りと破裂音が鳴り響いた。近くの橋が落ちたと思い、見に行こうとした時に、同じ地区の住民の方から「原子力発電所が爆発した。逃げなさい。」と言われた。15時36分に福島第一原子力発電所が爆発したことを知った。

そこから、避難生活が始まった。すぐに戻れると思っていたが、一年後も家に帰ることはできなかった。福島県内の避難所を回ったが入れず、2日かけて、関東に向かうことになった。関東でテレビを見て初めて、津波や原発事故の様子を知った。避難した方向に放射性物質が流れていることも知った。

関東の高校に入学することになり母親と市役所に手続きにいったときに、駐車場でしばらく待たされることになった。役所の職員が放射線量を計るカウンターを持ってきて、放射線量を計られ、庁舎の外で手続きが行われた。差別を感じたとともに、ここにいていいのか辛い気持ちになった。高校の途中から入学したこともあり、誰かに話しをしたかったが、(気は遣ってくれたが)聞いてくれる雰囲気もなく、それが辛かった。

別の場所に避難した地元の友達には大学進学をあきらめた友達もおり、後に「大学にいけないよ」と言われて、申し訳ない気持ちになった。こうしたことが積み重ねられ、人生が変わったように思う。

##### ・Bさんの経験談

震災を経験したのは小学生の時で、当時は授業中だった。興奮する子、泣き叫ぶ子がいたことを覚えている。すぐに避難場所まで避難したが、その場所も危険だったため、さらに高いところへと逃げた。避難場所から地鳴りが聞こえたため、まちを見ると真っ黒な壁にまちが飲み込まれるのが見えた。みんなパニックになりながらも、一気に高い山へと逃げた。山から見た津波に流されたまちの姿はすごい映像だった。車や家など様々なものが流されていた。その後は、トラックで避難所まで運んでもらい、奇跡的にそこで父と再会



することになった。

数日後に自分のまちに戻り、流されたまちを見た。何もなく、ぐちゃぐちゃになったがれきがあるだけだった。そこで、人生が終わった感覚になった。母が安置所にいることを父から聞かされ、めちゃくちゃ泣いた。安置所で母の遺体を見ることができなかったことを今も後悔しているし、一生残ると思う。その後、弟が亡くなったこと知らされ、安置所で棺の中にいる弟の顔を見て、人生で一番泣いた。妹は見つかっておらず、どこかで生きていてほしいと思っていたが、数年後に手続きを出した。そのことも後悔してるし、後悔ばかりです。

この先、幸せなことがあっても震災前より幸せになることはないのかと思っています。家族もなくしたし、震災に蝕まれている感じがあり、全部マイナスに下がっていくような人生なんだと感じている。

#### ■お二人の話から学んだことや今後考えていきたいこと

##### ○理解すること、知ろうとすることの大切さ

Aさんの事例で感じことは、本人は悪くないのに、まして、震災で辛い、大変な思いをされているのに、差別的な扱いを受けることはあってはならないことと思います。放射能に対する無知、相手が経験したことや相手の心情に対する無理解からこうした差別が生まれるとも思っています。意図せず相手を傷つけることはあることですが、そうらないためにも、私たちは、震災を経験した相手のことを知ろうとしたり、心情を推し量ることが大切なことと改めて感じました。配慮や気を遣うことも必要であるが、何より相手の声に耳を傾けることも大切なことであると感じました。

##### ○どう寄り添うことができるのか

小学生であったBさんにはあまりにも壮絶な出来事だったのではないかと思います。容易に相手の心情を汲むことはできないと感じました。前を向けるようになってほしいと思う反面、10年経ってもそれが難しいことを改めて感じさせられました。Bさんの気持ちを全てわかることも、気持ちを前向きになるよう変えることはできることではありませんが、関わったその時だけでも、Bさんが会ってよかった、楽しかった思える瞬間をともにつくることができたら思いました。

### 3.11 ユースダイアログ【5】

#### ■登壇者 2名

- ・宮城県石巻で被災し、兵庫県内の大学に在学（Aさん）
- ・福島県郡山市で被災、大阪の高校に在学（Bさん）

#### ■登壇者二人の話しの概要

#### ・Aさんの経験談

震災当時は小学生。学活の時間に地震が起きた。机が倒れたり、窓ガラスが割れて、うずくまったり、泣き出す女の子がいて、私は男子と教卓付近にいて、やばいと思っていた。それから起きることも知らず、深刻になるというより、はしゃいでた。

グラウンドに避難するよう訓練していたが、窓ガラスなど割れていたのので、体育館に避難した。保護者が迎えに来た人は帰っていった。自分の親は、迎えが遅かった。親がやっときて、家に帰ろうとしたが、どこからともなく「津波が来るぞ」と聞こえてきた。声と共に大勢の大人が走って学校に戻ってくるので、家族と学校に戻った。

戻る途中、足元まで津波が来て、学校に戻るのがあと一歩遅かったら、全身水につかっていたと思う。家に戻っていった友達は流されて亡くなった。学校の一階部分はすべて水に流された。そこから一か月ほど避難所生活を経験した。

自分の学校に避難したが、食料もなく、かんぱんとバナナくらい。当時食べたもののメモがあるが、一週間でメモ帳一枚埋まるかどうかというくらいしか食べ物がなかった。大変な状況だったが、小学生だったので、深刻さは感じなかった。食料の配り方で、妊婦さんや子どもへの配慮に関してなど、大人がもめているのを目にし、悲しかった。

お風呂に入れなかったり、着替えがないのが嫌だった。大阪に避難したが、大阪の友達は自分が震災にあったということを知らない。特別視されたくなく、震災のことは話したくもなかった。聞かれた時以外は震災の経験話を話したことがない。

自分の経験を話していいのかわか、迷いがある。当時の自分の避難行動、どう思っていたのか、大人をどう見ていたのかを伝えることは、自分にしかできないのかもしれないと思うようになった。

#### ・Bさんの経験談

小学校から下校しているときに発災した。地震があるなんて何も考えてなかった。早く家に帰りたいくらいの気持ちでいた。地震の時は、倒れないように近くのフェンスにしがみついていた。近くの友達も、泣いていたり、しゃがみこんだりしていた。腰が抜けたようになって、小学校6年生が抱き起してくれた。当時、天気がコロコロ変わり、余震も連続していたことを覚えている。地震がおきたら、こんな不思議な感じがするんだくらいに思っていた。

家に戻ると、冷蔵庫は開いていて、水道も電気もきていない。食料、飲み物を確保するためにコンビニに行った。コンビニには車がいっぱい止まっていて、食料、水などがあつという間に売り切れていた。たべものを備蓄することは大切と気が付いた。

原発の存在は知らなかった。シーベルトと言われても理解できなかった。外で遊ぶなど言われたが、遊びたかった。祖父母が放射能についての知識があったので、避難することになった。福島市に避難したが、食べ物もなく避難所からすぐに追い出された。友達もその避難所において、遊びたかったが、追い出され、新潟まで避難した。新潟の避難所は毎食弁当などを

出してくれて、お風呂も近くの銭湯に入ることができた。

仲良い子ができたが、ずっと一緒にはいられなかった。遊ぶ友達がいないという状況が一番つらかった。しばらく新潟にいたが、親戚が大阪にいたので、大阪に避難することになった。被災したことをあんまり深く受け止めていない。大阪の先生が福島からきたことを紹介して、なぜ大阪に避難しているのかを説明した。

それ以降 3 回転校することになった。友達がいないことがストレスで親と喧嘩した。親は親戚がいても、自分は知っている人がいない。なんでこんなところに来たのかということ問い詰めて喧嘩した。大阪の学校では当初いじめにあった。

#### ■お二人の話から学んだことや今後考えていきたいこと

##### ○震災を理解できずにはしゃぐ子どもがいるということ

A さんも、B さんも、当時ことの深刻さが理解できず、はしゃいだり、遊びたかったなどの話をされている。後々、大人と話をしたり、メディアなどで状況を理解したり、時間をかけてことの深刻さを理解していることがわかった。多くの被害が出た震災であるがことの深刻さを子どもたちが理解するには時間がかかる。災害時、一見すると不謹慎と思われるような反応や行動を子どもたちが取ることがあるということを支援者として理解しておきたい。

##### ○子どもの孤立を防ぐ配慮について考える

震災を起因として、親の職業が変わったり、避難先を転々とするなど、子どもたちの生活環境が変わることはよくある。そして環境の変化は子ども本人が選択できることは少なく、おとなの都合、決断によることが多くなる。子どもの立場を理解し、その心情に寄り添う大人がいるかどうか、また悩みを話せるような友達を作れるか、信頼できる人の存在が近くにあるかどうかは、震災を経験した子どもたちの成長に大きな影響を与えている。

### 3.11 ユースダイアログ【6】

#### ■登壇者 2名

- ・宮城県気仙沼市で被災し、宮城の大学に在学（A さん）
- ・福島県富岡町で被災し、福島の大学に在学（B さん）

#### ■登壇者二人の話の概要

- ・A さんの経験談

震災当時は小学生で、下校途中に発災した。実家は海から歩いて 10 秒の場所、通っていた小学校は高台にあった。地震はこれまで経験したことの無い揺れで、立っていられなかった。震災一週間前に避難訓練をしていたので、その経験から自宅ではなく学校に戻った。もし、家に戻っていたら死んでいたかもしれないと思うとぞっとする。

学校にもどるとガラスが割れていたり、ひび割れが目立ち、これまでの地震とは違うと感じた。

学校に親戚が迎えに来て、高台にある親戚の家に妹と避難した。サイレンなどになっていたが、10mの津波が来るなんて想像もできなかった。すぐに帰れるだろうと思い、懐中電灯で宿題をしていた。親戚の家は山にあり、夜に見ると海の方が火事で明るかった。ラジオもなく、津波の被害を知ることはできず、実家がどうなっているかもしれない状況だったが、海が燃えていることを見て初めて危機感を持った。夜通しサイレンが鳴り続けており、サイレンで起きた。

親にも会えず、家のことも心配になり始めた。親は別の高台に避難していた。親が携帯で記録していた津波の動画をその時初めて、啞然とした。一か月くらい親戚の家で暮らし、避難所と親戚の家を行き来する生活を過ごした。支援物資や炊き出しの暖かいごはんが、寒かったのが美味しかった。自衛隊のお風呂提供もありがたかった。一か月くらい経って、自宅跡を見に行ったら。その頃、近所の誰々が無くなったという話しが聞こえてきた。友達が亡くなるという話はなかったが、親の仕事がなくなり引っ越していく友達がいて、寂しかった。2011年の9月から仮設住宅に入居したが、壁が薄くて、夏暑くていい思い出はない。

#### ・Bさんの経験談

富岡町から両親の出身地に避難した。大学進学をきっかけに福島県に引っ越しをした。震災当時は小学生。音楽室で帰りの会をしているところで発災した。地震の揺れで、オルガンがゆれていたり、掃除ロッカーが倒れたり、ロッカーのランドセルがすべて落ちていて、亀裂が入って隆起している地面も見えた。校庭で親の迎えを待っているとサイレンが鳴り始め、鳴りやまない状況が続いた。不安になり泣き始めたクラスメイトを慰める先生の姿が10年経っても忘れられない。

そういう様子を見て、ただ事ではないということを理解した。家族が迎えに来て、家の様子を聞いた。家は倒壊の恐れがあったが、一旦家に戻った。避難する場所が決まったのは夕方だったが、その後、家に戻るまで5、6年たつことになることは想像もしていなかった。避難所の体育館では、余震が度々あり、停電も発生していて、揺れるたびにみんなが懐中電灯で天井を照らしていた。食料も足りなかった。

通っていた小学校は廃校になり解体されている。放射線量が高い地域は、建物の解体が進んでいて、通っていた幼稚園もなくなった。福島の大学を受験した際に、実家の近所を訪問したが、亀裂などそのままの状況。避難が解除された地域でもそのままの状況になっている。原発が3月12日の段階でまだ爆発していなかったことは、今日のために調べたらわかったこと。当時の記憶が不明瞭になってきている。避難するときは、みんなが車で避難したので大渋滞した。車中では、まだ楽観的だったが、母が落胆していたのが印象的だった。県南地域まで避難し、友人の祖母の家で食べたカレーライスが最高に美味しかった。2日間満身に食べられなかった。避難先はどこも避難者で一杯、より遠くの避難所へ移動していった。大阪を経由して、現在の避難先に落ち着いた。

■お二人の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

○現実を理解するのに時間がかかるということ

B さんのお話の中で、不安になり泣き始めたクラスメイトを慰める先生の姿を見てただごとではないと理解したことが語られました。避難を始めたときは翌日に帰れると思っていたなどのお話もあります。他のユースダイアログに登壇いただいた若者の中には、揺れをジェットコースターや遊園地のように感じて、テンションが上がったと話した方もいらっしゃいました。

東日本大震災のような大規模な災害を子どもたちはすぐに理解できず、友達や先生、肉親のような近い人の受け止め方からことの深刻さを理解していくのだと思います。そして理解したことを言語化するのには時間がかかるのだと思います。

震災による悲しみ、喪失感から来る無力感、そういったことからの回復など、震災の影響による心の変化は、大人より一歩遅れて子どもたちに現れるのではないかと思います。

○大人の背中を見ているということ

A さんのお話の中で、震災で一番ショックだったことについて、「死体から指輪を取る人を見たこと」、「友人宅に泥棒が入り、ガラスが割られていることを見てショックだった」という言葉がありました。

B さんのお話では両親や家族が、再建に関する考え方の違いで精神的にボロボロになり、御本人も傷ついたというお話がありました。震災の直接の被害ではなく、その後の大人の対応で間接的に心に被害を受ける子どもたちが多いことがわかります。

一方で、A さんは「しんどい時期はあったが、一番頑張ってきたのは親で、その姿を見て頑張れた」という話もあります。被災地に入ったボランティアの方々との交流で元気になったという声も多くあります。

被災した子どもたちは、しっかりと大人の背中を見えています。直接子どもたちを支えることができなくとも、責任と慈しみのある行動を背中ですすことで子どもたちが安心できる環境に繋がることを自覚したいと思います。

### 3.11 ユースダイアログ【7】

■登壇者 2名

- ・福島県富岡町で被災し、避難生活を経て現在は福島県福島市に在住（A さん）
- ・岩手県陸前高田市で被災し、仮設住宅を経て現在は災害公営住宅で生活（B さん）

■登壇者二人の話の概要

- ・A さんの経験談

小学生高学年の時に震災を経験した。その日は、小学校の体育館で卒業式の準備のため、紅白幕を出したり、椅子を並べていた。大型トラックが通ったのかな？と思った瞬間

に大きな地震がきた。さらに強い地震が来て、長く続いた記憶があった。小学校では、避難訓練は年に3回ぐらいやっていたが、教室での訓練しかしていなかった。まずは、机の下に隠れていたが、体育館ではどう行動すればいいのか分からず、走って逃げる子、動けなくて固まる子など様々だった。地震の後は校庭に避難して家族の迎えを待っていた。雪が降ってきて不気味だった。家族が迎えに来て自宅に帰った。余震もあり、古い家だったので車の中で過ごしていた。あと2、3日すれば学校が再開するのでは？と思っていた。翌朝、町内放送があり川内村に避難してくださいとあり、川内村の祖母の家へ避難した。大人たちは、原発の映像やニュースを見ていた。小学五年生の自分にとっては内容が難しすぎて、分からなかったが事態が悪化していることは、分かった。両親に限らず、原発事故に関する知識がない大人が多い印象を受けた。次に茨城県鹿嶋市へ避難した。そこで中学3年生まで4年間生活した。学校の友達とは、震災のことはタブーというか話したことはない。福島出身ということも、言わなくて良くなった。今、ふりかえるとカウンセラーなどに話せると良かったと思う。原発事故のことを理解できたのは、中学3年生ぐらいになってから。ネットなどで調べた。それまでは、理由も分からないままこれまでの生活が出来なくなったと感じた日々だった。富岡町は、震災前とはまるで変わってしまった。語り部活動は、自分の記憶にある町を思い出すための手段としてやっている。

#### ・Bさんの経験談

小学生低学年の時に震災を経験した。帰りの会をしていた時地震が来て、机の下にもぐった。教室の水槽が大きく揺れて、波打っていた。ある程度揺れが収まり、校庭に避難した。地割れがあり、水が噴き出していた。泣いている友達が多くて、寒さより怖さが勝っていた。父が迎えに来て、山の上にある親戚の家に行こうと言われた。その時に津波の放送が流れてきて、後ろに津波を見ながら避難した。弟や妹は母が迎えに行った。0歳児の弟を心配していたが、妹はのんきにしている妹を見て安心できた。うちの家族は全員助かった。親戚の裏山から町を見ていたら、黒い海水が濁っていた。黒い波の中に人がいたり、屋根の上で助けを求めている人を見た。その後、避難所へ行った。私は活発で避難所ではよく怒られた。当時0歳児の弟も夜騒ぐので、子どもの苦手が人もいるため、子どものいる家族は支援学級のクラスへ移動した。そこでは高校生のお姉さんが遊んでくれた。その後は、小学校の仮設に入った。仮設は壁が薄くて、隣の家も小さい子がいる家庭で、子どもが騒いでいる音、扉を閉めた音もまるまる聞こえていた。それはお互いさまで、私は寝相が悪くて足が壁にぶつかる音まで隣の家に聞こえるぐらいだった。隣の家の子が仲いい子だったことと、違う地域の子や、学年が上のことも遊べて楽しかった。中学校に上がるタイミングで、中学校の仮設に移動し、今は隣町の災害公営住宅で暮らしている。父と一緒に語り部の活動を始めた。陸前高田は、震災前の町とまるで変わってしまい、自分にとっては別の町という感覚。自分の記憶にある町を思い出すための手段としてやっている。

■お二人の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

○子どもたちへの状況の説明、悩みを相談できる場の大切さ

Aさんの事例で感じこは、子どもたちにも分かるように説明をすることの大切さです。福島での原発事故当時は、様々な情報が錯綜し、大人でも何を信じて何が正しいのか、その判断に悩むことが多くありました。しかし、Aさんのように当時大変なことが起きたことは理解したとしても、なぜ突然住んでいた土地を離れなくてはならないのか、なぜ自分が住んでいた場所を話さない方が良いと思ったのか、その悩みや葛藤を聞いてあげられる場や人をきちんと確保することが大切だと思いました。

○非常時だからこそ、子どもが子どもらしく過ごせる場をつくること

小学生低学年であったBさんは、当時のことを鮮明に記憶していました。避難所で活発に遊ぶ自分も、0歳児の弟も、叱られたそうですが「子どもが苦手な大人もいる」と受け止めていました。大きなストレスを抱える人が集まる避難所では、子どもや障がい者などへの配慮も必要だということに、改めて気づかされました。大人から思うと、仮設住宅での生活は大変ではないかと、思いがちですが子どもたちにとっては異年齢や違う地域の子もたちとの新たなつながりが生まれて、楽しい思い出にもなっていると感じました。

○若者が語り部をするのは、震災前の故郷を大切にしたいから

Aさん、Bさん共に語り部活動をしています。自分の経験話すことで誰かに役立てて欲しいと思うと同時に、震災前の故郷を大切にしたいという言葉が印象的でした。「まるで別の町になった」とは、Aさんの言葉ですが、語り部をしながら、自分自身の故郷の記憶を取り戻しているのだと思いました。

### 3.11 ユースダイアログ【8】

■登壇者2名

- ・福島県伊達市で被災し、北海道在住（Aさん）
- ・宮城県山元町で被災し、山形の大学に在学（Bさん）

■登壇者二人の話の概要

- ・Aさんの経験談

震災当時は中学生だった。午前中に卒業式があって、自宅に帰ってきたときに発災した。この世の終わりかと思うくらいの揺れだった。揺れが収まり、自宅から出てみると、寒くて、雪が降り、鳥が騒いでいて、晴れていたはずなのにまっくらで、天変地異とはこういうことかと思っていた。

ライフラインが止まり、情報がなかったので、自分を含めてみんなパニックだった。弟だけが小学校にいて、父が小学校まで弟を迎えに行ったが、戻ってくるまでの30分が長

く感じた。弟が父と一緒に帰ってくる姿をみて、生きていて安心した。

伊達市は内陸で津波はこなかったが、原発から60km。後日、ラジオで原発が爆発したという話を聞いた。母が「このままだとチェルノブイリになる」と言った。

チェルノブイリという言葉が理解できず、母に質問した。母から話しを聞き、初めて福島県に原発があるということを知った。

母は今すぐに避難しなければという話をして、父は国が大丈夫と言っているので大丈夫といていた。3月15日に親戚のいる山形に避難し、一旦福島に戻り、その後の暮らしについて家族会議が何度も開かれた。

最終的にどうしたいの？と聞かれた。当時、合格していた学校があったのでそちらに進みたかったが、家族で山形に自主避難することになった。

福島の高校に一月通い、山形の高校の試験を受け受かったので、山形で高校生活を3年間過ごした。山形の短大に1年通ってから、2年生になるタイミングで家にいたくなくて北海道に一人で移住した。北海道で働きながら卒論を出し、短大を卒業し、以来6年北海道で暮らしている。

#### ・Bさんの経験談

震災の時は小学生、ホームルームの時間だった。2日前に大きな地震があったが、この地震は今までと違うという感覚をもっていた。大人も動揺していて、教室にあるテレビは映らないし、水道も出なくて、何の連絡もないのに体育館に人が避難していて異常な感じがした。両親とも無事で、迎えに来てくれたが、そのときに、浜がなくなり、人が亡くなっているという話を聞いた。津波に関して、チリ地震津波のイメージしかなく、なぜ津波で浜がめちゃくちゃで、人が死んでいるのか理解できなかった。

翌日から始まった被災生活が苦しかった。水、電気がない生活が始まり、3か月以上続いた。プロパンガスだったが、水がでなく、食べるものもなく、何もできなかった。家の片づけをして、汗をかいたが洗濯ができず、服が汚れて行って、肌の弱い背中などにはあせもができた。流された街の現状を理解するのがつらかった。震災前に利用していたコンビニやスーパーが瓦礫まみれになっていたり、いつになったら元の生活に戻るのか、想像もつかなかった。家は流されなかったが、生活に必要な施設がことごとくなくなった。

6人家族で、大人が4人いたが全員仕事があって、家に3歳の妹とふたりっきりだった。食べ物をどこで買うか、水はどこでもらえるか、その日使う水やたべものはすべて自分で手に入れた。妹をおぶって水や食料をもらいに行くような生活をしていた。津波被害はなかったが、家を失っているのに関わらず、津波被害があった家庭と同じように被害があったと思っている。

避難者の生活がままならない状況で学校が再開された。学校の体育館に避難していて、体育館から学校に通う友達が結構いた。避難所で炊き出しがあり、友達がいくというので一緒に行ったが、炊き出しをしている人に家の状況を聞かれて、津波が来ていないということを知



話すによかったねと言われ、大人が考える被災者の判断基準というのがわかった。生活は同じく苦労しているのに、何を言っているのかがわからなかった。大人の様子を見ていて、人の卑屈さ、人の弱さみたいなものを感じた。

災害が起こる度に、床上浸水かどうかなど報じられ、被災者を区別しているように感じるようになってきた。震災の話をするときに、被災者の分断を生むようなことを恐れていて、被災した辛さは、誰かが決めるものではなく、基準をつくってはいけないと思っている。そういう気持ちがあり、大学で勉強している。

#### ■お二人の話から学んだことや今後も考えていきたいこと

##### ○震災後、大人の行動で傷つけられる子どもたちがいること

Aさんの震災後の生活について御両親の意見が分かれ、最終的には「どうしたいの？」と本人の決断を迫られました。その後もその決断について本人が責任を取る形となり、ご両親や、祖父母、中学高校の先生などから受ける異なる意見を受け止めなければならなくなります。放射能の問題について賛否両論あり、大人でも判断が難しい状況です。大人でもどうしたらよいのかわからない状況の中、大人がこどもに状況を判断させるような理不尽があり、さらにその判断を応援してくれる大人がいませんでした。Aさんは人間不信に陥ったとおっしゃりました。

震災の直接の被害ではなく、震災による肉親や友人などの喪失体験でもなく、震災後の大人の対応によって傷つけられるこどもがいることについて、私たちは改めて考える必要があると思います。

##### ○支援者として被災者との接し方

津波の被害を逃れたBさんでしたが幼い妹と二人、3か月もの間、ライフラインの止まった家で生活していました。洗濯もできず、服が汚れてあせもができた。幼い妹を連れて、祖父母両親の分まで重い水を自転車で運んだ。そんなことが現代の日本で起きていたことです。

Bさんのそばには多くの支援者がいましたが、「家は大丈夫だった、両親が健在」、そのような状況だけで判断され、Bさんに寄り添う人はいませんでした。Bさんは、「ボランティアが被災者に何かするというのは、民間だからできる人としての活動を心がけてほしい」とおっしゃっています。制度としての被災者支援には、支援の対象となるのかどうか一線を引かざるを得ない状況がありますが、支援者として被災地を訪れる際に、被災者と接するとき、どう接するかについて貴重な示唆を与えてくれています。

以上